フィールドノートから：ハワイ・モロカイ島

塩谷亨

平成11年から14年度にかけて数回に渡りハワイに言語調査に行く機会を得た。調査の主要な目的である昔ながらのハワイ語を継承している人々による生のハワイ語の記録に従事する中で、様々な場所を訪れ、様々な人に会うことができた。今回はその中から、モロカイ島で行った言語調査での経験の一部について紹介したい。

辺りはまだ真っ暗な朝6時前、ホテルで呼んでもらったタクシーに乗り、「ホノルル空港に行く前にここに寄ってくれ」と運転手に住所のメモを渡した。そこには大通りから外れた小さな道沿いにあるアパートの住所が書いてあった。「この住所わかるか」と聞くと、「もちろん知ってるよ!」と驚いた声が返ってきた。ダウンタウンの裏道、日本人旅行者の立ち入りは昼間でも絶対に勧められない地域にタクシーは向かった。暗い駐車場の向こうのアパートから出てきたのは、ハワイ文化のエキスパートであるカウアイイキ氏である。彼は今回のモロカイ島での調査に全面的に協力を申し出てくれた人である。彼はハワイ文化のことであればなんでも熟知した人物で、レイ作りの名人としては日本の雑誌でも紹介されている程であり、また、フラの師匠でもある。私はハワイ大学留学中にダンス学科のタカミネ先生のフラダンスのクラスを長いこと聴講していた。彼はその時に踊りの指導補助をしていたので、その頃からの知りあいである。まだ若いにもかかわらず、彼の知識はクプナ（ハワイ語でご老人のことを敬意を込めてこう呼ぶ）に相当するとまで称された程のハワイ文化の達人である。

小さいプロペラ機でモロカイ島に向かった。私が今までに乗った中で最も小さい旅客機であった。モロカイ島は観光地化も進んでおらず、日本人観光客にもまださほど知られていない古き良きハワイの残る島である。空港に着くと、モロカイ高校ハワイ語学級教諭のマヌヴァイ氏が出迎えてくれた。マヌヴァイ氏もハワイ大学時代からの知り合いで、地元のハワイ語話者の紹介を快く引き受けてくれた。レンタカーを借りて空港を後にした。立派な路線バスシステムが在りタクシーもたくさん走るオアフ島以外では、レンタカーは無くてはならない道具である。

マヌヴァイ氏が紹介してくれた一人目のネイティブスピーカーがハナカヒさんである。彼女は昔ながらのハワイ語を継承する人々の中ではかなり若い世代である。そのような若い世代にもかかわらずハワイ語を習得できたのは、父母ではなく祖父母に主に育てられたおかげだということである。彼女はモロカイ島の歴史に興味があり、今回も、歴史的に重要な場所を巡り、そこにまつわる話をハワイ語でしてくれるというので、ありがたくお願いすることにした。

まず洗濯を終えなければいけないと言うので、コインランドリーで打ち合わせをし、その後、彼女の誘導する場所へと移動した。移動の途中、彼女が突然車を止めた。彼女

は「あそこにトカゲが横たわっているのが見えるか」と山を指差した。急いでビデオカメラを用意した。ビデオカメラで録画しながらその山を見ると、山肌に色が薄くなっている部分が見えた。カウアイイキ氏が「見える、あそこが頭で、あれは舌だね」と答えた、私はビデオカメラを通して見ていたので全体の様子を捉えにくかったが、その影は確かに大きなトカゲのように見えた。ハワイの伝説には数多くの巨大とかげが登場する。トカゲは恐ろしい怪物として登場することもあるし、民を守る守護神として登場することもある。この山もそのうちの一頭が姿を変えたものだということである。

風光明媚なモロカイ島らしいきれいな海を臨む公園に到着した。この海岸でモロカイ島の歴史で重要な出来事があったと言うのである。DAT レコーダーとビデオカメラを設置した後、彼女に話を始めてもらった。以下にその話の概要を紹介する。

モロカイ島は農・漁業共に昔からたいへん豊かな場所であった。今でも、モロカイ島沿岸は随所にハワイ古来の養魚用いけすが存在している。このような富める大地モロカイ島を狙って、他島の酋長がたびたび侵略戦争をしかけてきた。カイコロラニもその一人であった。彼は海が見えなくなるほどの大船団でモロカイ島に侵攻し、島の半分をたちまちのうちに破壊した。そこで人々はモロカイ島の神官たちに助けを求めた。神官たちはこの海岸に来て熱心に祈り始めた。それを海上から見ていたカイコロラニの軍勢は神官たちに嘲笑を浴びせた。その後、船を陸付けしようとしたとき、戦士が海に落ちた、また一人、また一人と次々に戦士たちは海に落ちて死んでいった。そしてとうとうカイコロラニの大軍勢は酋長のカイコロラニただ一人になってしまった。恐怖に慄いたカイコロラニはそのまま敗走した。この事件は Moloka'i pule 'o'o 「モロカイ島、熟した祈り」として、モロカイ島の神官の祈りの強力を表す言葉として今も伝えられている。

いかにもハワイの古来の風習が多く残るモロカイ島らしい伝説のハワイ語による語りを記録することが出来たのは大きな収穫であった。物語が終わってから、彼女は次のように付け加えた。「神官たちは何を祈っていたのか。それは、敵を滅ぼすのろいの祈りではない。彼らの祈りは、自分たちの守護を求めた平和の祈りだったのだ。」

ハワイにはいろいろな祈りがある。祈りにはパワーがあり、祈りは人に良いことをもたらすこともできるが、逆に害をなすこともできると多くのハワイの人は今でも信じている。私の踊りの師匠が彼自身の師匠からの教えとして次のように話していたの思い出した。「私の師匠はいろいろな祈りを知っていた。人を傷つける呪いのようなものも知っていた。でも、そのような暗黒面には決して入り込むものではないと教えられた。そのような呪いは自分自身に帰ってくるのだ。」あくまでも、幸せをもたらすための祈り、それがハワイの祈りのあるべき姿だということをあらためて実感した調査であった。

執筆者紹介

所属：室蘭工業大学共通講座

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp